

昼過ぎから降りだした雨が、夕方には容赦のない豪雨に変わっていた。

激しく打ち付ける雨音の中に、まるですべてがかき消されていくようだ。

盛国は、その景色を見るときもなしに見つめている。

雨の庭を眺めているその後ろ姿に、清盛は、なぜかしばらく声をかけることをためらった。

誰よりも気安く、気兼ねなどない相手のはずだ。それなのに、そこにはまるで、自分のまったく知らぬ者が立っているかのように感じた。

常に自分に向けられる笑顔。自分を案じるまなざし。盛国は肯定も否定も、淀みなく口にする。

ただ従うばかりではなく、清盛が違う道を行こうとすれば引き戻してくれる。偽りのない相手だからこそ、信頼は深かった。

だが盛国にも、こうして、一人静かに物思いにふける瞬間があるのだ。

それまで、自分ではない他のところを見つめている盛国など、意識したことがなかった。だから、不思議な感じがしたのかもしれない。

雨の中に、盛国はいったい何を見ているのだろう。  
邸で待つ妻のことか。亡き父親のことか、それとも。

ふと、清盛は、いつかの雨の夜を思い出した。

…ただ一度の夜。

あれもたしか、こんなひどい雨の夜だった・・・